書評

アカデミー版『シェリング全集』第一巻

大橋　良介

バイエルン科学アカデミー（Bayerische Akademie der Wissenschaft）はシェリング自身が一八二八—四一年に会長として率いていたものであるが、このアカデミーの編纂になる左記の新シェリング全集第一巻が、シェリング生誕二百年（一九七四）に遅れること数年にして昨秋刊行されるに到った。

Friedrich Wilhelm Joseph Schelling, Historisch-kritische Ausgabe, Bd. I, 1 (359 s), Frommann-Holzboog, Stuttgart 1976　（以上 AA. と略称）

この尊敬すべき大編纂事業への慶賀の念をこめつつ、以下新全集の紹介と第一巻の書評とを試みたい。

一　新全集の研究史的意義

一・一　後述する記念祝祭版シェリング全集の編者シュレーター（M. Schröter）は彼の全集への序言として一九二七年にこう記している、「こうして……今のところカントとショーペンハウエルの批判的全集は殆ど完成し、ライプニッツとゲーレスの全集は着手されている。シュライエルマッヘル、シェリング、ヘーゲルの作品については尚も遂行されねばならぬか、もしくは準備されつつあるところである。」（*Schelling Werke*. Münchner Jubiläumsdruck, Bd. I, S. XIII.）

既に半世紀も前にシュレーターが「尚も遂行されねばならぬか、もしくは準備されつつある」と語ったドイツ観念論（とその周辺）の思想家群の史的—批判的全集は、しかしいずれも実際はそう早く日の目をみた訳ではない。

シュライエルマッヘルの全集はその後間もなく刊行され始めたが（*Schleiermacher Sämtliche Werke*. Hrsg. von L. Jonas, A. Schweizer, F. Lücke u. a. 1836—64）、しかしこれは未だ批判的全集ではなく、従って半世紀を経た今も尚「それゆえ数十年このかた、新しい全集が要求されている」と言われざるを得ないのである。（M. Redeker, *Friedrich Schleiermacher* Sammlung Göschen, W. d. Gruyter, Berlin 1968 S. 313）

ヘーゲルに関しては一九〇七年以来のラッソン版が批判的全集に近い体裁をとるが、完全な意味での史的—批判的全集はライン・ヴェストファーレンの科学アカデミーによって一九六八年から刊行され始めたばかりである。（*Hegels Gesammelte Werke der Rheinisch—Westfälischen Akademie der Wissenschaft*）

フィヒテの史的—批判的全集はバイエルン科学アカデミーの刊行委員会によって、ヘーゲルの新全集と同じくD・F・G（Deutsche Forschungs-gemeinschaft）の財政援助のもとで一九六四年以来その刊行が始められた。（*J. G. Fichte-Gesamtausgabe*

d. *Bayerischen Akademie der Wissenschaft*) 因みにこのフィヒテの史的—批判的全集はフィヒテ生誕二百年祝祭の記念事業でもあり、総じてこのフィヒテ生誕祝祭がフィヒテ研究に於ける一つのエポックを画していることは周知の通りである。(Baumgartner. H. Michael, W. G. Jacobs: "*J. G. Fichte—Bibliographie*" Stuttgart—Bad Cannstatt 1968, 参照)

さてシェリングに関しては、一九五四年のシェリング百回忌を機としてシュルツやフールマンスの研究が現われてシェリング後期哲学を軸とする新たな研究上の関心が呼び起され (H. Fuhrmans, "*Schellings Philosophie der Weltalter*": Düsseldorf, 1954. W. Schulz, "*Die Vollendung des deutschen Idealismus in der Spätphilosophie Schellings*" Stuttgart 1955 等を参照)、以後シェリング研究は六十年代に入って益々盛況の一路を辿るが、(Hans J. Sandkühler: *F. W. J. Schelling* 1970 を参照) シェリングの史的—批判的全集は、シェリングを含むドイツ観念論研究のこのような状況の中で、既に久しく待たれていたものなのである。

一・二　しかし史的—批判的全集が作られる場合にまず問題となるのは、従来の全集である。一般に、従来の全集が背負っている特定の傾向や限界を除いて思想家の全貌をその有るがままの姿に於て示し出すことは史的—批判的全集の中心課題の一つであると言える。(この書評の枠を越えるので詳述は控えるが、従来の全集が後の史的—批判的全集を甚しく妨げたり困難にしたりする例は、曾てのニーチェ全集にもみられたし、現在進行中のハイデッガー全集にも、遺憾ながら予測されるものである) それでは従来のシェリング全集には具体的にどういう問題点があるのであろうか、我々の所有する全集にはまず、K・F・A・シェリングの編集になるものがある。(*F. W. J. von Schellings Sämmtliche Werke*, 14 Bd. Stuttgart und Augsburg, 1856—51)、これは第一部門 (Bd. I～X) と第二部門 (Bd. XI～XIV) とに分れ、前者は主として「作品」を、後者は「遺稿」を収める。しかし収録された遺稿は実際に存していたものの全体から見ると氷山の一角にすぎない。たとえばシェリングの本来の体系を成すはずであった『世界時代』("Weltalter") は多くの草稿を有すが、全集に収められているのは、この内のただ一つだけである。(Bd. VIII, S. 105—344) ところで、ミュンヘン大学図書館に蔵されていた大部の未発表の遺稿は第二次大戦の戦火で焼失したが、東ベルリンのドイツ科学アカデミー中央図書室には尚も厖大な所蔵がある。その中の断片の一つが最近 B. Loer の手で出版されたが (B. Loer, *Das Absolute und die Wirklichkeit über Schellings Philosophie*, W. d. Gruyter, 1974) このローエル女史の報告から推察されることは、未発表の遺稿が重要な資料をいかに多く含んでいるかということである。たとえば同女史は一二八頁以下でシェリングの一八〇九—二一年及び一八二八—五四年の時期の "Schreibkalender" なるものを上記の「断片」の年代解明の手がかりとしている。この遺稿は、中期シェリング、特にエルランゲン時代のものが欠けてい

る点では非常に措しまれるが、しかしシェリングの思惟の歩みをシェリング自身が記録している点で極めて興味深いものと思われる。

単に量的な面の限界ではなく質的な面でもこの全集は或る制約を負っている。即ち編者のK・F・A・シェリングが記すように、彼は父の全集を編するに際し、版を重ねた作品の場合はいつも最後の版を採り、父が発表すべく予め定めておいた遺稿のみを採録している。その限りでこの全集は後期シェリングの「自己理解のドキュメント」である。(この指摘を筆者は新全集編者の一人であるW・ヤコブス氏の教示に負うている。)

この全集を新たに配列し直したのが上記M・シュレーターのいわゆる記念祝祭版である。(*Schellings Werke*, Münchner Jubiläumsdruck, 1927—54) この全集は「遺稿巻」Nachlaßband として『世界時代』の草稿二編を付加するが、しかしこれで『世界時代』の草稿がすべて出揃った訳ではない。(ミュンヘン大学図書館に蔵されている一八二七年の草稿を筆者は閲覧する機会があった。) 加えて、この記念祝祭版はその新配列自体に編者の解釈を持ちこんでいる。即ちこの全集への序言によると、シュレーターは全集を「本質的な主著すべて」を集めた主要部(Hauptbände)と「重要度の、やや劣る諸論文」を集めた補足部(Ergänzungsbände)とに分ける。(Erster Hauptband, S. VIII) 今日のシェリング理解からすれば極めて重要な『啓示哲学序文』はシュレーターの全集では補足部に入れられている。このことはシュレーターのみならず当時の学界そのもののシェリング理解に由ると思われる。けだし先述の如く後期シェリングの精密な研究は漸く今世紀も五十年代の半ば以降のことだからである。

要するに記念祝祭版もまた、シェリングの思想形成を解明する為のテキスト批判の資料を含まない。そこで、たとえばヘーゲルを念頭におくとき、次のような問題が生ずる。即ち、K・デュージングが指摘して以来注目を惹いたことであるが、シェリングは一七九七年の『自然哲学の諸構想』(“*Ideen zu einer Philosophie der Natur*”) の序文で用いた「思弁」なる語を一八〇三年の第二版では「反省」と訂正している。(Erster Hauptband, S. 663 ff 及び K. Düsing; *Spekulation und Reflexion*; Hegel-Studien, Bd. V. 1969. S.95—128 を参照) その裏には紛れもなくシェリングとヘーゲルとの相互的思想形成という事態が隠されている。こういう事態を解明する為の十分な資料は現在までの全集の中には提供されていないのである。これらのことはシュレーター自身が認めており、彼はA・デムプと共に今日の新シェリング全集のイニシアチヴをとるのである。(A. A, Bd. I. S. 7)

一・三　半世紀を経て実現の運びとなったこのたびのシェリングの批判的—史的全集は、その第一巻に報告されている通り、ドイツ国内のみならず国外も含めて、シェリング研究の権威者のほとんどが編集、作成に加わる。(この点は、先に触れたハイデッガー全集と、大きな対照を示している)。編集の総指揮

には A・デムプと H・クリングス（ミュンヘン大学主任教授）が当り、編集委員には M・バウムガルトナー、H・フールマンス、D・ヘンリッヒ、W・ヤコブス、W・シュルツ、X・ティリエット、M・シュマウス、K・エンギッシュ、故 H・ツェルトナー等が加わり、ミュンヘン大学を中心とするドイツ国内の各大学、研究所からの人材が編集チームを形成している。ドイツ国外からの参加は上記 X・ティリエット（フランス）の他に、モスクワ科学アカデミーの T. I. Oisermann が居る。もちろん東ベルリンの科学アカデミーの協力は言うに及ばない。

全集の構成は四部に分れ、I、作品（シェリング既発表のもの）、II、遺稿　III、書簡　IV、聴講者による講義筆記となる。我々の注目を惹くのは、第一部で各テキスト毎に冒頭に付されている「編集報告」である。ここで各テキストの伝承事情、形成、影響史が述べられることになっている。しかしこれはシェリング哲学を当時の精神史的関連に於て洞察することを要し、果して、且つどこまで一々のテキストについてこのような試みが成功するかは、必ずしも自明的ではないように思われる。このことは各巻末尾の「文献目録」でも同じである。ここではシェリングに関する書評、論争、シェリングの引用する文献等が可能な限り追跡され、明示される。この目録作成だけでもその背後にある緻密にして厖大な作業が察せられる。但し第一巻に関する限りでは、史料の精確さを期する余り、欄外注が数種に分けられるなど、かなり煩雑に過ぎる弊はみられる。（第二巻以降はこれが改められると聞いている）

二　第一巻の諸作品

二・一　このアカデミー版全集の第一巻（A. A. Bd. I. 1）はテュービンゲンにおけるシェリングの学習時代の作品四編を年代順に収録する。これらはいずれもシェリングが一八〇九年に "*Philosophische Schriften*" に再録した初期作品の更に以前に遡る。つまりシェリング自身がこれらを自分の思惟の歩みの以前に属するものとみなしたのである。これはしかしシェリングの自己理解を基準とする限りでの評価であり、二百年後の我々から見れば当然、これらに対する見方も異なってくる。

冒頭の『ハーンの墓にて朗唱されたる悲歌』（*Elegie Bei Hahn's Grabe Gesungen*）はシュネーベルガーの文献目録（Guido Schneeberger: F. W. J. von Schelling. Eine Bibliographie. 1954）にもザントキューラーのそれ（Hans J. Sandkühler: *F. W. J. Schelling*, 1970）にも採録されていない。シェリングはこれを一七九〇年に "Der Beobachter" と称する毎週発行の政治的、諷刺的雑誌に載せている。ハーン（Hahn, philip Matthäus）はシェリングの父親と交際があったと伝えられる、当時のヴュルテムベルクの高名な司祭である。それにもまして彼は高名な機械技術者でもあり、蒸気汽関車、天文時計、計算機械等の発明者として知られている。シェリングはハーンの機械学（Mechanik）それ自身の内に「自然の諸力」（S. 43）や「神性の最も純なる痕跡」（S. 43）を見る。この十段から成る短かい悲歌に既にシェリングの自然哲学と神智学の萌芽が見出さ

れるのである。

二・二　この巻で最も注目を引くのはラテン語で書かれた第二の収録作品『人間的諸悪の最初の起源に関する創世紀第三章の最古の哲学説話を解明せんとする批判的、哲学的試論』(*Antiquissimi de prima malorum humanorum Origine philosophematis Genes. III explicandi tentamen Criticum et philosophicum*, 1792) である。これはK・F・A・シェリングの全集にも収められてはいるが、ここではR・モクロシュによる初めてのドイツ語訳が付されている。この作品はシェリングのマギステル論文で、当時多少の反響は呼んだものの、やがて忘却されていく。忘却に拍車をかけた理由の一つには、これがラテン語で、それもシェリングの晦渋なドイツ語文体と通ずるラテン文体で書かれていることがあったと思われる。その意味でモクロシュの翻訳の労は高く評価されるべきである。ただ翻訳というものは不可避的に訳者の理解と解釈とに左右されるものであるから、そこから生ずる若干の問題点を指摘しておくことは、書評の役目の一つであろう。モクロシュのドイツ語訳では折々、一つの用語が原文の連関によって別々の語で訳されるが、その基準が必ずしも明確ではない。(例えばラテン語のSpontaneitasはドイツ語でSpontaneität とWillkürとに訳し分けられる。)最も問題の多い語はこの作品の中心概念としての「悪」(Malum)の語である。(原文では複数形。) 訳者はこのラテン原語を訳文の表題ではBosheit と訳し本文中ではこの訳語にÜbel, Böse を加えて三通りの訳し分けをする。恐らくは、シェリングが人間的諸悪と名づけたものを、心理的もしくは主観的なもの(Bosheit)、不幸や災難という意味合いのもの(Übel)、又は道徳上のもの(Böse)、という風に分けて訳したとも推察される。(この三語を併用する一四二頁の文節からの臆測である。) しかしこのような訳し分けは「解釈」としては可能であっても原典翻訳にそのまま持ち込むことは、それが原著の中心概念にかかわるものであるだけに問題を残す。この訳し分けはラテン語原文に馴染まぬ読者に急所を逸失せしめる惧れなしとは言えぬであろう。

ともあれこの作品を通して、シェリングの思惟の出立点にいろいろの照明が当てられ得る。通常彼の思惟の道は神話に始まって神話に終ると考えられるが、その場合は本巻の第三番めに位置する『神話について』(1793) の論文が「最初期の論文」とされるであろう。しかし実は更にその前に上記の、人間的諸悪の起源に関する「哲学的試論」が書かれているのである。シェリング自身がこの「哲学的」という点をしばしば強調している。又『自由論』での悪の論を知る人は、シェリングがここで既に悪の問題を「理性の最大の関心」(rationis plurimum interest) と名づけていること (S. 63) を偶然とは見ないであろう。またフィヒテとスピノザにシェリングの思惟の母胎を見ることは、ほぼ定説となっているが、この作品を通してカントの哲学、それも『宗教論』の及ぼす影響が少なくないことに気づかしめられる。このテキストに付された「編集報告」はシェリングに対

する当時の書評や風評を伝えており、我々は過ぎし時代の現前を楽しむことができる。

二・三　『最古の世界の神話、史的説話、哲学説話について』(*Über Mythen, historische Sagen und Philosopheme der ältesten Welt*, 1793)、及び『哲学一般の形式の可能性について』(*Über die Möglichkeit einer Form der Philosophie überhaupt*, 1794) は共にシュレーターのいわゆる主要部 (Hauptbände) に収められており、通常シェリングの最初期の論文と見做されていたものである。シェリング研究史はこの二つの作品から出発したと言っても良い。ここでは厳密なテキスト批判のもとでこの二作が採録されると共に、その成立史、影響史が明らかにされる。K・F・A・シェリングの全集で我々の見ていたテキストは幾つかの版の一つにすぎず、且つそれらが多くのヴァリエーションを含んでいたことを我々は初めて知る。又周知の如く後者の論文の成立史、影響史に関してはフィヒテとの関係が問題となるのであるが、それについても「編集報告」は当時の資料を伝えてくれる。のみならずこの著をめぐるヘーゲルやヘルダーリン等の書簡も報告抜粋される。尚この著に対し酷評に近い書評が出たが、これに対しシェリングは『声明』(Erklärung) を出して、次の論文『哲学の原理としての自我について』の序文で自分の立場をより詳細に述べることを予告するにとどめている。この書評も声明も共に収録されているので、これを通して我々はシェリングやフィヒテの新しい哲学が、その出現当時、どういう無理解と拒否反応に遭遇したかを知ることが出来る。その拒否反応は根底ではどの時代にも共通して見られる、真の哲学精神に対する常識の拒否反応とも見ることが出来る。

アカデミー版シェリング全集第一巻の1はこの『声明』で終る。既にこの一巻からも言えるが、これから数十年に亘ると予想されるこの全集編纂事業は、その都度の成果の刊行をそのままドイツ観念論研究史の足跡として刻むであろうことは想像に難くない。

最後にこの拙き書評に更に蛇足を添えることが許されるならば、筆者は日本人としてこの全集事業の成果を一体どのような仕方で自己のものとなすべきかという自問を禁じ得ない。この全集に基づいて批判的、史的研究を進めることは差し当っての必要な途には違いないが、哲学本来の立場からはこの仕事自体は一つの予備的段階にとどまる。我々としては、このような仕事を基礎としつつもう一歩を進めて、シェリングを遠い西洋の地にではなくて足下の地盤の内に看取することが要請されるように思われる。大きな思想家は異国の遠い過去の中によりはむしろ、足下の現在の内に出会われるように思える。

（筆者　滋賀医科大学講師）

編集後記

本誌「哲学研究」の編集委員であられ、執筆者としても多年にわたって御活躍になり、本会が大変お世話になりました